

令和8年度久万高原町農業再生協議会水田収益力強化ビジョン

1 地域の作物作付の現状、地域が抱える課題

久万高原町は、基盤整備を進め水田農業の振興策を講じ、稲作の省力化を進めるとともに、夏秋野菜の振興に取り組んでいる。

水稲については「久万高原清流米」がブランドを確立しており高値で取引されている。また、夏秋野菜（トマト、ピーマン）についても産地化している。

しかし、農家の高齢化と農業の担い手不足が深刻化している。こうした中、従来は農地の資産的保有傾向が強く、規模拡大志向農家への農地の流動化は顕著な進展をみないまま推移してきたが、最近になって農家の一層の高齢化により、地域農業への関心が高まるとともに、担い手農家を中心とした稲作受託組織の設立等により、農地の流動化が進む可能性が高まっている。

そのため、今後は、高齢者でも比較的栽培しやすい水稲の作付面積を維持しつつ、認定農業者等の意欲的な農業者に対して積極的に利用権設定等を進め、水田面積の維持を図っていく必要がある。

2 高収益作物の導入や転換作物等の付加価値の向上等による収益力強化に向けた産地としての取組方針・目標

○ 適地適作の推進

- ・ 町内の基幹作物として栽培されている雨よけトマト、ピーマンは、ここ数年高値安定の販売単価で推移しており、収量の確保により高い収益性が見込まれているため、久万高原町の転作作物として推進しているもの。
- ・ 町独自の研修制度等を通じて新規栽培者の確保育成を図る。

○ 収益性・付加価値の向上

- ・ 令和元年度に久万高原町スマート農業研究会が発足し、令和2年度に無人航空機（ドローン）による水稲防除実証による有効性が確認された。
また、ラジコン草刈機の試行による有効性も確認していることから、今後省力化が急務となっている防除、除草等の各作業ではスマート農業の導入を検討する。
- ・ 高温期のハウス内（トマト）における高温対策として、細霧冷房の導入試験により高温障害を回避し、生産性・品質向上が確認できたことから、細霧冷房の導入を支援していく。

○ 新たな市場・需要の開拓

- ・ 雨よけトマトは、病害虫発生の予察等総合的な防除体系の確立により化学農薬の使用を県基準対比 50%以上削減し、土づくりの徹底等により化学肥料の使用量を 50%以上削減している。
これらのトマトを使用して町内で製造されているトマトジュース等加工品は県外への販売等を視野に入れた販路開拓を模索する。

○ 生産・流通コストの低減

- ・ 地域計画を策定し、地域の農地（水田）を担い手へ集積するとともに連担化や出荷ルートの一統を図り、効率化を目指す。

3 畑地化を含めた水田の有効利用に向けた産地としての取組方針・目標

○ 地域の実情に応じた農地の在り方

- ・ 不在者地主の増加を踏まえ、町外在住の地権者が地域の担い手へ円滑に耕作を依頼できるよう、意向確認や情報提供、農地バンク活用支援を含む調整体制を整備し、農地の流動化と地域計画の実効性を高める体制を構築する。

○ 地域の実情に応じた作物・管理方法等の選択

- ・ 省力的な栽培が可能な作物として、農産物直売所で需要があるタカキビ・コキビ・モロコシ等郷土料理の材料として使用される雑穀の栽培推進を模索する。
- ・ 収益性の高い雨よけトマト・ピーマンについては、新規就農者等の推奨作物として、支援体制を整備する。

○ 地域におけるブロックローテーション体系の構築

- ・ 振興作物である野菜の生産動向を踏まえ、関係機関との情報共有と連携を図りつつ、各農家の経営条件に応じたブロックローテーション体系を提案・指導し、地域全体で計画的かつ持続的なローテーションの実施を推進する。

○ 水田の利用状況の点検方針・点検結果を踏まえた対応方針

- ・ 用水路の老朽化をはじめ水利等に支障を生じ水稻の栽培が困難になっている水田については、雑穀等栽培可能な品目を選定し栽培を振興する。
- ・ 高齢化等を理由に水稻栽培が困難となった水田のうち、可能な水田については、雨よけハウス等を建築し、新規就農者等の雨よけトマトやピーマンの圃場として、推進・支援していく。

4 作物ごとの取組方針等

町内の約 630ha（不作付地含む）の水田について、適地適作を基本として、産地交付金を有効に活用しながら、作物生産の維持・拡大を図ることとする。

（１）主食用米

コシヒカリを中心に栽培されており、ＪＡが取り扱う「久万高原清流米」がブランドを確立して高値で取引されている。今後も愛媛県特別栽培米の生産認証を受け「安全・安心」で環境に優しい米作り及び売れる米作りの徹底によって米の産地としての地位を維持する。前年の需要動向や集荷業者等の意向を勘案しつつ、消費宣伝にも力を入れ、消費者の求める米を栽培し、その取組が伝わるよう産地ＰＲを行う。

（２）非主食用米（飼料用米）

地域に適する多収品種がないこともあり、主食用米と同じ品種を用いることにより省力化及び低コストでの栽培を行う。ＪＡが取りまとめを行い県内の飼料会社と契約を行うため、生産者は取り組みやすい。また、担い手が近隣農地を集積して取り組むことを支援し、生産性向上を図る。

（３）麦、大豆、飼料作物

麦及び大豆については、道の駅や直売所等販路が拡大しており、それらの需要に応じて栽培を行う。

飼料作物については、畜産農家の自家利用に限られているため、不作付地への導入を推進し、未利用農地の解消と農地の有効活用を進める。

（４）高収益作物（園芸作物等）

「トマト」・「ピーマン」については、県内有数の産地で、「エコファーマー」認定及び「全農安心システム」の認証を受け、「安全・安心」で環境に優しい栽培を行っており、産地の維持、拡大を図る。また、従来の販路以外に道の駅や直売所等販路が拡大しており、それらの需要に応じて栽培を行う。

花きについては、卸売市場や農協等従来の販路以外に道の駅や直売所等販路が拡大しており、それらの需要に応じて栽培を行う。また、不作付地を活用した作付け拡大を促し、遊休農地の解消につなげる。

葉タバコは日本たばこ産業株式会社、薬用作物は農事組合法人ヒューマンライフ土佐へ販売しており、契約するメーカーの需要に応じて栽培を行う。

その他野菜については、小規模農家が道の駅や直売所へ出荷していることが多い状況を踏まえ、現行の栽培面積の維持に努める。

5 作物ごとの作付予定面積等

(単位:ha)

作物等	前年度作付面積等		当年度の作付予定面積等		令和8年度の作付目標面積等	
		うち 二毛作		うち 二毛作		うち 二毛作
主食用米	371.1	0	365.3	0	385.0	0
備蓄米	0	0	0	0	0	0
飼料用米	0	0	0	0	0	0
米粉用米	0	0	0	0	0	0
新市場開拓用米	0	0	0	0	0	0
WCS用稲	0	0	0	0	0	0
加工用米	0	0	0	0	0	0
麦	0.1	0	0.3	0	0.1	0
大豆	0.2	0	0.4	0	0.2	0
飼料作物	1.1	0	1.1	0	1.1	0
・子実用とうもろこし	0	0	0	0	0	0
そば	0.1	0	0	0	0.1	0
なたね	0	0	0	0	0	0
地力増進作物	0	0	0	0	0	0
高収益作物	91.8	0	91.8	0	97.0	0
・野菜	86.6	0	79.4	0	88.0	0
・花き・花木	2.0	0	2.4	0	2.5	0
・果樹	3.2	0	6.1	0	4.0	0
・その他の高収益作物	1.8	0	4.0	0	2.5	0
その他	0.3	0	0.7	0	0.5	0
・雑穀	0.3	0	0.7	0	0.5	0
畑地化	0	0	0	0	0	0

6 課題解決に向けた取組及び目標

整理 番号	対象作物	使途名	目標	前年度（実績）	目標値
1	トマト・ピーマン	振興作物転作助成 （トマト・ピーマン）	作付面積	（2025年度） 26.07ha	（2026年度） 27.03ha
2	トマト・ピーマン	担い手作物加算 （トマト・ピーマン）	作付面積	（2025年度） 17.72ha	（2026年度） 18.54ha
3	野菜、花き、工芸作物等 （基幹作物）	振興作物転作助成	作付面積	（2025年度） 3.30ha	（2026年度） 3.14ha